

風土



秋
扇
神
蔵
器

心にもつもる月光源義忌

名月も祭もまねく神田川

養老の滝の句のあり秋扇

金輪際色なき風にのこさるる

田の中の前方後円墳に秋

薬研堀障子堀あり草の花

萩トンネル潜り閻魔の前に立つ

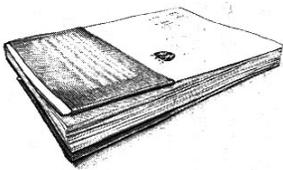
白昼の嶋立庵や蚯蚓鳴く

おがたまやわがたましひのほろほろと

辛口の酒は仏に野分吹く

入院す午前十時の酔芙蓉

かなかなのこゑ遠ざかる担送車



竹間集

同人作品



広島忌

工藤ミネ子

朝涼の影や「あしながをぢさん」に
鳴焼やししみ母に似たる人
鶴鴿のすべる歩みの晩夏かな
校正の朱筆の走る広島忌
茄子馬の蒼き駿馬を立たせけり
潦ばしやばしや踏みて児の初秋
律儀なる文字の文なりつづれさせ

朝 蟬

柴田 久子

八月や朱肉の芯のくぼみがち
動物図鑑枕辺に子の夏休み
八月の夢二の墓に女佇つ
とり落とす銀のスプーン秋暑し
仏壇のマツチ擦る音秋めきぬ
バス降りる伊勢丹前や初嵐
朝蟬や樹木にもある木の番地

出羽三山

中村 洋子

鬼やんま出羽三山へ奥参り
雲の峰茂吉の歌碑に巡り合ふ
黄菅咲く風の高さに弥陀ヶ原
爽やかや五重塔へ二百段
弁慶の油こぼしの坂に汗
汗しぼる磴の二の坂三の坂
秋草の高さは風の高さかな

星月夜

橋添やよひ

鯖街道一本通す星月夜
蛤御門大夕立に攻めらるる
とくとくの泉の底や夕蜩
盆みちは土の匂ひの朝曇り
秋暑し黒光りせる油桶
寺田屋のひらかなふすま夕蜩
羅や夫残しては旅立てず

石打つひびき

南 うみを

初秋のシエフの帽子のいや高し
ははに色あらば茗荷の花のいろ
秋耕の石打つひびきてのひらに
かなかなの沁み入る水に鍬ひたす
コンバイン様の残せし稲を刈る
稲刈るや蜻蛉の羽音まつはり来
ましら酒吉野熊野と舐め比べ

走り諧

島谷 征良

糸とんぼ水の気配をはなれ得ず
青蔦や壁にちひさき窓ひとつ
子子の大き頭の沈みゆく
紅露追鷗もつとも生きし露伴の忌
涼しさよ稲荷の小さき扉あき
走り諸掘りたる土のはや乾く
羽吹かれ土用烏の糞まりぬ

夏逝く

大竹 淑子

かたばみの種子たねに撃たるる大暑かな
雲ばかり見てみて夏を逝かしけり
早稲は穂に天空は雲片寄せて

京・西川油店 二句

盆東風や買ひて菜種の白絞油
行商の桶と天秤てんびん棒ぼう送南風
爽涼の西に織月かかりたる
地虫鳴く宵もあらなむ禅の寺

棚田村

工藤ミネ子

涼風やまなこ大きく遮光土器
新涼や熟寝の稚の重きこと
子等の声久し鎌上ぐいぼむしり
呼び太鼓一打は闇を降ろしけり
若き等の手長足長踊りの輪
黒髪の乙女等の打つ盆太鼓
大太鼓七張りが吠ゆ送り盆
今日の闇明日へ継げて踊り果つ
釣瓶落し座して棚田に影攫らる
背山より秋の暮れゆく棚田村

山河集

同人作品



神蔵 器選

教壇にアルプスの水夏期講座
膝ふかく折り流灯を水に置く
流灯のゆくあはき闇ふかき闇
八月を見送る風と思ひをり
かなかなや袖畳みして母の衣

浅田 光代

二千余の磴の途中のかき氷
油こぼし坂の途中のかき氷
山伏の一本高齒残暑かな
こより注連首に昇殿残暑かな
うつむきし即身仏や夕蝸

奥田 茶々

新涼や仏にこころあづけをり
銀漢や中のひとつは師でありぬ

青柳寺

林 いづみ

夏百日母訪ふことのとぎれずに
熱高き折の夜伽のつづれさせ
月鈴子七振りまでは数へけり

布施まこと

食卓に塩のこぼれて原爆忌
酔芙蓉真白き朝を迎へけり
魂棚や十四代のあたらしく
夕立や重ねて本の堆き
オルゴールの森の噴水躍り出す
生者死者影を一つに盆をどり
美しく人を語りて門火焚く
見送りて残暑の中に残さるる
短夜や地球の裏のタンゴ聴く
薬湯の熱きに浸り盆の過ぐ

雲所 誠子

山の地図

石井美智子

犬の尾の千切れんばかり山笑ふ
倒木の息吹未だあり雪解溪
分校の窓の高さに紫木蓮
青ぬたや山より雨の走り来る
春臙母に似て来し指の節
風よりも軽き花種蒔きにけり
縮む背を比べ姉妹の柏餅
流木の竜の形にかぎろへる
駒草の俯くばかり砂礫原
登山帽鐔より雨の滴り来
山登り己と出合ふこと頻り
夏山や風も馳走の握り飯
落石に手足固まる夏の尾根
夏霧や馬の背道を四つん這ひ
鳥海のまりも見てより泉汲む

第 35 回桂郎賞佳作

解散の声はきはきと登山果つ
汗流す湯の花の宿粗蕨
白神山の巖に影生む晩夏光
長病みの姉の窓より夏の街
母の指父の忌数へ益用意
山地図のルートをたたみ秋惜しむ
一枚は虫食ひの葉や藪柑子
雪纏ひ裾は海へと出羽の富士
鉦彫の杓子の手擦れ女正月
母に割るしやう油うすめの寒卵
供花を選ぶ墓所の残雪おもひつつ
一群れにひとむれの声鳥帰る
糠漬けの魚焼く匂ひ鳥曇
水温む屋号の謂れ忘れられ
山の地図なぞる指先下萌ゆる

◇特別作品◇(抄)

桜もみぢ

南奉 栄蓮

水かけあふ声や小川の跣の子
草刈りて園丁匂ひ撒き散らす
羅の几帳の白し迎賓館
付け下げの細身の二人黒揚羽
橋脚は天保七年ひつじ草
紗のとばり「船弁慶の晩餐会」
萩の風十二単の衣桁かな
立札の裾捌く音のさやけくて
敦盛を祀る小島やつづれさせ
桜もみぢ急ぐ貫之邸趾かな

風土独語／神蔵器



かなかなの森みんみの林かな 根岸 善行

蟬の発生にはそれぞれかなりはつきりとした時間差がある。これは東京近郊の場合だが、いにいに蟬に始まり、油蟬、みんみん蟬、蝸（かなかな）、法師蟬（つくつく法師）等と続く。

法師蟬は勿論秋の季語であるが、蝸も秋季に入っている。ただし蝸は早いものは梅雨明けから鳴き出し、遅いものはたしかに秋に入っても鳴いている。

みんみん蟬は、体長約三五ミリ、体には黒色に緑、または淡黄色の斑紋がある。羽は透明で、きらきらと輝いていた。盛夏に出現し、樺など好んで高い木に止まり、ミーン、ミーンと高い声で鳴く。子供の頃は蟬の王様と呼び、一夏に一匹でも捕まえられると鼻高々としたものであった。

一方、かなかなは、夏の夕ぐれにカナカナ、カナカナと透き徹った涼しい声で鳴く。その声の底に何か哀愁が漂っていて、聞く人の心に一抹の陰翳を置く。

作者善行さんは何も語ってくれない。しかし、点は示している。しかも、大胆に具体的にである。これは俳句だけに許された省略法である。省略の徳というべきものであろう。

草田男忌地に炎熱のある限り 豎山 道助

草田男忌は昭和五十八年八月五日。翌八月六日、カトリック吉祥寺教会において密葬、二十日、東京カテドラル聖マリア大聖堂で本葬が行われた。この年は日照りで暑い日が続き、特に八月六日の密葬の日は猛暑であった。

草田男の第四句集『来し方行方』（昭16―22年）の中の、昭和二十二年の作に

炎熱や勝利の如き地の明るさ

がある。桂郎は絶賛して「すごい」とうなるような声を出した。国敗れ、国土は焦土と化し、戦没者二百三十万余（内民間人八十万余）、一億すべて耐乏生活を送っていた。私は俳句をはじめ二、三年、しかも田舎の蚕室の二階で一人寝た切り、それも個人のこととは別として、この句の「勝利」という意味がすつきりしなかった。

後年読んだ草田男の自句自解に《当時、勤務先の学校の寮に生活していたが、高い二階の廊下の端の窓から、はるばると道路を距てた夏の真昼の、くらめくような明るい野面を見渡しているときにできた。そして「勝利」を口にしたのぼしうる可能性が絶無である歴史的段階が、かえって私をしてその語を叫ばしめた》とあり、《私の場合、「勝利」という言葉は、何等かの意味での「光栄の存在」たり得る可能性、その獲得の謂である》とあった。

道助さんの句も、地に炎熱のある限り、人は「光栄の存在」勝者たり得る可能性を持ち得る、ことであろう。（以下略）

風土集



神蔵器選

八月の真つ只中を梓川上尾 根岸善行

橋高く架かり八月来たりけり

かなかなの森みんみんの林かな

植木屋を入れたる寺の盆用意

東京タワースカイツリーへ鱗雲

かなかなや子の描く顔に手足生え

大いなる西日を浴びて施餓鬼舟

施餓鬼幡浜から登る石の段

施餓鬼果て葛葉南瓜葉うらがへり

芭蕉葉を引き裂く空の青さかな

蝙蝠の降り来る前の空深し

丸石も尖りし石も残暑かな

かまつかや金の砂子を撒く夕日

降るほどのなかに一匹法師蟬

不揃ひの飛び石伝ひ松葉牡丹

福井

池田光子

東京

柿沼盟子

草田男忌地に炎熱のある限り 川崎 豎山道助

秋暑しレジに差し出すドル紙幣

船長の母音涼しき地中海

中年の悪の愉しさ黒麦酒

地球今涼し兜太と水母居て

群雲と共に押し来る大夕立

梅干して田舎住まひを通しけり

雷火走りし峡道を往き来して

天と地を繋ぎ大和の稲光

秋早つづく大坂西鶴忌

跳ねさうな八頭身の初さんま

雀来て初秋の影動きをり

吹き通るあと秋風と思ひけり

初秋のどれもまんまる魚の眼

嬰兒の言葉たしかや秋に入る

五條

上辻蒼人

伊東

小松ひろし